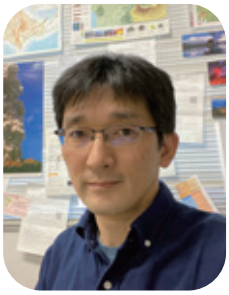
地学が人と人をつなぐ

～ジオ・フェスティバル in Sapporoの取り組み～

PROFILE

横山 光 よこやま ひかる（北翔大学教育文化学部教授）



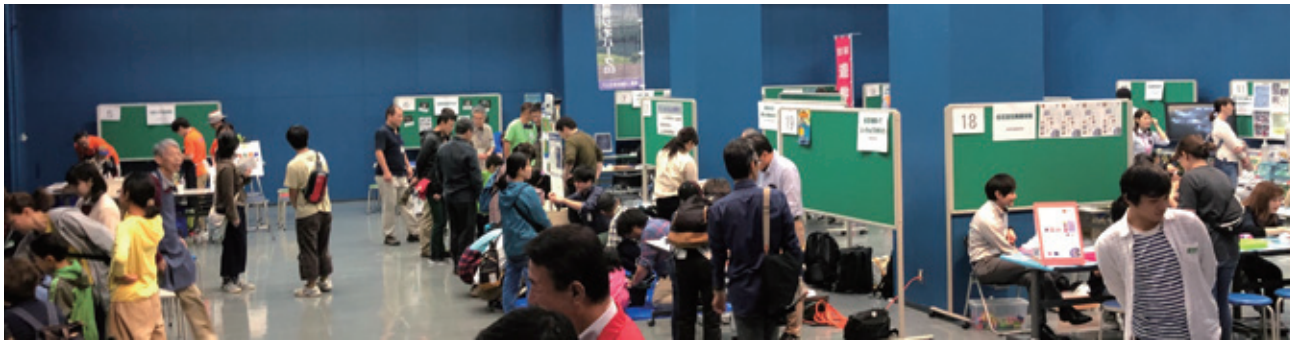
1973年、北海道岩見沢市生まれ。大学院修了後、北海道内の中学校教諭、北海道立教育研究所附属理科教育センター研究研修主事を経て、2014年に北翔大学着任。同年よりジオ・フェスティバルin Sapporo実行委員長。他に、洞爺湖有珠山ユネスコ世界ジオパーク教育普及委員長、日本火山学会学校教育委員、ブラタモリ洞爺湖編の案内人なども務める。専門は理科教育の他、サイエンスコミュニケーション、防災教育（自然事象の仕組み）など。

1 広がるジオ・フェスティバルの輪

「ジオ・フェスティバル」というイベントをご存知ですか。このイベントは、子どもたちの、地球科学や北海道の自然に対する興味関心を高め、子どもたちの科学する姿勢を育成することをねらいとした「地球科学」に関わる実験や体験を行うもので、2005年に札幌市博物館活動センターにて始まりました。第4回目までは札幌市で毎年開催されましたが、会場の都合や運営の中心メンバーの異動などにより、それ以降は開催地を変えながら、全道各地で点々と実施していました。しかし、2011年からは釧路市で毎年開催されるようになり、2014年からは札幌市でも毎年開催、2015年からは旭川市、2017年からは函館市でも定期開催となり、現在はこれらの4都市で毎年開催されています。多くの学校関係者や地質学や天文学に関わる人々が体験ブースを出展しており、参加者にはリピーターも多く、毎年多くの参加者が見学や体験に訪れています。15年間という時間をかけて、着実に「ジオ・フェスティバル」の輪が広がりつつあります。

2 手作りイベントだから「つながる」

では、具体的なイベントの様子を、昨年実施された「ジオ・フェスティバルin Sapporo 2019」（以下、ジオフェス札幌）を例に紹介しましょう。昨年のジオフェス札幌は、2019年10月5日（土）に開催され、合計24



体験ブースが賑わう、ジオ・フェスティバルin Sapporo 2019の様子（札幌市青少年科学館）

のブースと2つのサイエンスショーが実施されました。運営関係者は105名にもなり、その日の科学館展示室入館者は1,374名でした。

保護者と会話をするのもジオフェスの醍醐味

まるでブース出展者のように解説する大学生（中央）

体験内容は、化石の発掘体験やレプリカづくりなどの古生物分野の実験、石や砂の観察と標本づくりや火山の噴火について学ぶ地質全般の実験、大気の動きや大気圧の体験などの気象分野の実験、星座について学べる天文分野の工作や実験など様々です。中には、博物館や地質調査に携わる企業などが、最先端の機器を体験できるブースを出展するなど、子どもだけでなく大人も楽しく学べる内容となっています。

ブース運営スタッフが足りない場所は、教員を目指している学生ボランティアが手伝います。学生のほとんどは地学素人なので、ジオフェス札幌ではまず、ブース出展者の皆さんが学生へレクチャーするところから始まります。そしてイベントが終わる頃には学生はまるでプロのような解説ができるようになっています。

また、ブース運営をしながら子どもたちの保護者との会話も生まれます。保護者からは「この子がこんなに集中する様子は初めて見た。」などの声や、より専門的な質問を受けることもあります。このように、ジオフェス札幌では、地学を通して人と人がつながりながら参加者双方の学びが深まっていくことも大きな魅力の一つです。

3 大人のジオ・フェスティバルの企画

さて、新型コロナウイルスが猛威を振るっている今年（2020年）は、これまで同様のジオフェス札幌を行うことができません。私たちも子どもたちを対象にした開催の中止を決定しました。しかし、私たちはただでは転びません。これまで子どもたちの対応に追われ、出展者同士がお互いの出展内容を十分に交流することができずにいました。「人と人のつながり」を大切にする私たちは、出展者同士がお互いの体験内容を発表し合う「大人のジオ・フェスティバル」を開催することにしました（10月現在、12月開催を企画中）。きっと新たなつながりや学びが生まれることでしょう。

来年は出展者同士がさらに結びつき、よりパワーアップしたジオフェス札幌の開催を目指します。

過去にボランティアで参加した大学生が、出展企業の社員として参加してくれました。これもジオがつないだ「縁」ですね。